

日本語と英語における丸ガッコの万能性が 英日翻訳に及ぼす影響

Hark, the crescents are whispering! Some observations on a parenthetical balance between two languages

谷 さつき

はじめに
英文の句読法の機能
英文の句読法の発達
parenthesesの出現
日本文の句読法の成立過程
句読点以外の符号の発展
日本文の丸ガッコの用法および用途
英文の丸ガッコの用法および用途
parenthesesから丸ガッコへ
翻訳の技法と丸ガッコの扱い
訳文における丸ガッコの位置
残像の問題
文脈と不釣り合いな丸ガッコ
丸ガッコが表現するもの
丸ガッコになれないparentheses
おわりに

先づ形の上の標準とした一つであった。(中略) コンマの切り方なども、単に意味の上から切るばかりでなく、文調の関係から切る場合が少くない。

されば、外国文を翻訳する場合に、意味ばかりを考へて、これに重きを置くと原文をこわす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すやうにせねばならぬと、かう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、訳文にも亦ピリオドが一つ、コンマが三つといふ風にして、原文の調子を移さうとした。(初出『成功』明治39年1月。)

文調を移すためにコンマ、ピリオドの数にまで二葉亭が傾注していた当時、日本では句読点の使用が普及していなかった。柳父 [2003: 49-73] によれば、「、」を小さな切れ目、「。」を大きな切れ目として用いたのは、明治17年(1884年)の文部省編纂『読方入門』であり、今日の句読法と同じである新保盤沢の『日本読本初歩』が刊行されたのは「あひゞき」のわずか2年前の明治19年(1886年)のことである。さらに20年後の明治39年(1906年)になって、ようやく句読法が法制化された。

西欧文の句読法(punctuation)に習う形で成立した日本語の句読法であるが、丸ガッコやダッ

はじめに

二葉亭四迷によるツルゲーネフの翻訳「あひゞき」が『國民之友』に掲載されたのは、明治21年(1888年)のことであった。その18年後の明治39年(1906年)、「余が翻訳の標準」の中で二葉亭は次のように述べている。

けれども、^{いやし}苟くも外国文を翻訳しようとするからには、必ずやその文調をも移さねばならぬと、これが自分が翻訳をするについて、

シュ等の符号は日本語に取り入れられた後は日本語の表記法として発展し、西欧文の句読法とは異なる用法も見られる。本稿の目的は日本文と英文における丸ガッコの用法と用途を確認し、他の符号と比べて英日翻訳の際に注意が向けられてこなかったこの符号の特徴と役割を浮き彫りにすることにある。

これ以降本稿では（ ）を英文・日本文の区別なく「丸ガッコ」と呼び、英文と日本文を特に区別したい場合には英文の（ ）を‘parentheses’と呼ぶこととする。

英文の句読法の機能

Crystal [2003 : 278] は句読法の機能を以下の4点に分けた。

- (1) grammar (ピリオド、コンマ、パラグラフ初めの字下がり等)
- (2) prosody (疑問符、感嘆符、カッコ等)
- (3) rhetorical structure (コロン、セミコロン等)
- (4) semantic nuance (注意の引用符 [scare quotes]、注目してほしい語句を大文字で始める等)

またHuddleston and Pullum [2002 : 1729–1730] は別の観点から句読法の機能を4つに分類している。

- (1) indicating boundaries (文頭の大文字、文末のピリオド、文中のコンマ、単語間のスペース等)
- (2) indicating status (疑問文であることを示す疑問符、固有名詞であることを示す語頭の大文字、所有を表すアポストロフィ、感嘆文であることを示す感嘆符等)
- (3) indicating omission (省略符号、卑語を伏字にする符号、音の弱化や接語状態を示すアポストロフィ等)
- (4) indicating linkage (orやandの代わりに使用されるスラッシュ、複合名詞を作るハイフン、2つの地名を結んで出発地と到着地を示すハイフン等)

上に2例挙げたが、つぎにこのような英文の句

読法が発達した歴史を概観する。

英文の句読法の発達

現在の西欧文の句読法システムは古代ギリシャ・ローマに起源を発する。Truss [2003 : 72] によれば、最古の句読法として知られているものは紀元前200年のビザンチウムのアリストファーンネス(アレクサンドリアの図書館司書)に帰せられる。この句読法は上中下のどこに点を置くかで区別する演劇用の記号体系で、役者にどれだけ息を吸い込むべきかを教えるためのものであった。

初めは音読用の指針であった句読法だが、黙読をする人々が現れたことから、音読用のリズムよりも文法構造を明確にするための句読法が必要とされるようになった。語と語を離す、文は大文字で始まる等の方法が発達し、12世紀までには基礎的な句読法が成立していた。符合の種類は様々であったが、印刷術の登場で精選されていった。現代英語の句読法が整ったのは17世紀後半である[Lennard, 1991 ; Parkes, 1992 ; Greenbaum, 1996]。文法構造を明確にする役割が発達したとはいえ、音調を表すという元来の役割も担っているため、現在でも使用法には差異が見られる。特にコンマが持つこの2つの役割が衝突するとき起こる混乱についてはTruss [2003] に詳しい。

parenthesesの出現

parentheses (単数形はparenthesis) の語源はギリシア語の*parenthesis* (‘an insertion beside’) で、中世ラテン語を経由して英語に取り入れられた [Partridge, 1953 : 63]。イギリス英語ではround bracketsまたは単にbracketsと呼ばれ、フランス語を経由して入ってきたラテン語の*braca* (trousers) が語源である [LDCE]。

parenthesesは14世紀末頃出現する。挿入部を周囲と区別する必要から、フィレンツェのChancellorを務めて公用文を担当したColuccio Salutati (1331–1406) が使用したが、形は「**厂**」であった。その後「**く**」の時期を経て、

Gasparino Barzizza (1359-1431) が () を推奨し、今日に至っている。文章中でカッコ内の語句と他の部分を区別する、あるいはカッコ内の語句を強調する役割を果たしていた [Parkes, 1992 : 48-49; Lennard, 1991 : 3-5]。Parkes [Ibid. : 155-157] と Crystal [2003 : 279] ではチョーサーの *Troilus and Criseyde* を通して、版を改めるごとに变化する句読法の変遷を辿ることが出来るが、丸ガッコは1532年版に既に見られる。(quod she) のように被伝達部を囲んでおり (quod は said の意)、3世紀後の1810年版でも依然として同じ用法で使用されているが、Crystalにある1957年版ではこの用法は消えている。

日本文の句読法の成立過程

つぎに西欧文から影響を受けた日本文の句読法の成立過程を概観する。

日本人が句点 (。)、読点 (、)、疑問符 (?)、感嘆符 (!) について最初に述べたと思われる文献は伴藁蹊の「国文世々の跡」(安永3年、1774年)である [飛田, 2002 : 67]。また文化7年(1810年)に蘭学者である藤林普山が『訳鍵』の付録として刊行した「蘭学逕」に、英語のピリオドに相当する「。」は終わりのしるしであることが記されており、日本語の句点「。」につながっていった [柳父, 2003 : 50-52]。

句読点使用はただちに一般化したわけではない。伴藁蹊から1世紀以上を経た明治14年(1881年)、伊藤圭介は『東京学士院雑誌』第2編第10冊で、洋文、漢文、日本の和漢文を比較して、和文においても句読段落を明瞭に区別するべしと主張した。その伊藤の文章では句点と読点を区別せず「。」のみが用いられており、段落末にカギかこの閉じる(⌋)方が置かれている [飛田, 前掲書, 67-68]。

句読点使用の一般化に時間がかかった要因の1つに、柳父 [2004] の主張する「日本文には、切れ目はなかった」点が考えられる。柳父が同書で引用している坪内逍遙の『当世書生氣質』(明治18年 [1885年] 晩春堂、『新選名著復刻全集』1982年、日本近代文学館)では、本文に「。」が

用いられて、句点と読点両方の役割を担わされているように見える。一方序文は延々と「。」なしの文が続く。当時の文章の書き方は句読点など全くないのが普通で、坪内が本文で使用した「。」は朗読される文章で息継ぎの箇所を示す印であった [柳父, 2004 : 69-70]。(現在の岩波文庫版では、句点と読点の両方が使用されている。)

日本文における句読表示の試みを列記した飛田 [前掲書, 80-81] では、当時の文章を書く立場にいた人々の迷走振りが窺えて大変興味深い。「。」だけでなく「,」「;」「:」の使用例も見られ、組み合わせも多様である。明治39年(1906年)文部大臣官房図書課の『句読法案』によって、ようやく「,」と「。」の使い分け表示が国定教科書の標準とされた [飛田, 同]。

句読点以外の符号の発展

句読点以外の符号については、天明8年(1788年)公刊の『蘭学階梯』で「, コムマ」「; ピュンクトコムマ」「: ドウピュンクタ」「? フラーガテーケン」「” ジヒシオ」「・ピュンクトム」の6種類が紹介されている。明治18年(1885年)4月には「羅馬字会」が「羅馬字にて日本語の書き方」を発表し、その第18条で「句点及び頭字の用ひ方は英吉利の文に異なることなし」と述べた。「肝要なる句点」である「, コンマ」「; 半コロン」「: コロン」「, 止まり」「? 疑問」「! 嘆息」に加え、「上の外に符号数種あり其重なるものハ次の如し」として、「() 括弧」が「— 横線」「[] 鉤括弧」「“ ” 引用」「- ハイフン」などと共に紹介されている [飛田, 前掲書, 69-72]。

明治時代の日本は翻訳書物にあふれていた。明治16年(1883年)に矢野文雄が『訳書読法』で翻訳書の読み方を説いたが、その範囲は歴史・地理・自然科学などあらゆる分野に及んでいた [丸山・加藤, 1998 : 53-60; 加藤, 1991]。また山田美妙、尾崎紅葉、巖谷小波、二葉亭四迷、幸田露伴ら文学者達は句読表示に関心を示し、様々な試みを行った [飛田, 前掲書, 73-81]。複数の西欧言語から知識とともに符号を取り入れた結果、昭和21年3

月、文部省教科書局調査課国語調査室作成発表の「くぎり符号の使い方〔句読法〕案」〔文部省教科書局調査課国語調査室（1946）、文化庁（編）、1986：71-82〕では、句点と読点を含め、符号の数は約20種にまで膨れ上がっている。

明治、大正、昭和の作家たちが工夫を凝らして符号を採り入れてきたことが、遠藤〔1962a, 1962b〕、大橋〔1962, 1963, 1964〕、山木〔1978〕などから窺える。遠藤〔1962a〕と山木は作家達が使用するダッシュ（—）とリーダー（……）を特に取り上げて論じている。中村〔1984〕も余情を表現する技術の1つとしてこの2つの符号を採り上げている。

かたや本稿で扱う丸ガッコはことさらに注目を集めることなく、あるのが当然なものとして存在しているかのごとくである。句読点が「。」と「、」に落ち着くまでに時間がかかったのに比べ、丸ガッコは容易に受け入れられたらしい。坪内は『当世書生気質』で既に用いている。

さる程に須河悌三郎は、桐山（名を勉六といふ）にたちわかれ、……

—坪内、『当世書生気質』, p.135

遠藤〔1962b〕は小説における内語を表わす符号を調査した。心理学でいう内語（発声器官の運動を全く伴わず心の中だけで話すこと、心中の対話、自問自答、頭の中でことばを浮かべて考えること）に独り言と呟きも含めたものを調査の対象とした。調査の意図は「現代の作家は、どのような符号を使って、この内語を対話や地の文と区別して表記しているか」を明らかにすることであったが、全く符合を用いない作家もいた。調査から得られた符号は7種類で、丸ガッコも含まれている。遠藤が丸ガッコの紹介で用いた「この用例がいちばん目立ちます」という言葉が、作家にとって丸ガッコは使いやすい符号であることと、読者に伝わりやすい符号であることを示している。

遠藤の調査から見つかった他の符号は次の6種類である。①— ②<> ③《》④「」⑤『』⑥2重引用符（符号は全て縦書き）。内語を表現

するという一つの目的をとっても、1906年に句読法が法制化されてから遠藤の調査までわずか60年、伴藁蹊を起点にしても200年弱という日本語の句読法歴の中で、いかに様々な試みが行なわれてきたかがわかるのである。ただし丸ガッコは工夫して取り入れられてきたというよりは、使い勝手のよさから広く浸透したと考えられる。それはつぎに述べる用法の多様さからも明らかである。

日本文の丸ガッコの用法および用途

佐竹〔2002：120〕は丸ガッコの用途を簡潔に説明している。

かっこ（ ）（（ ））〔 〕

注釈的語句を囲む場合に使う。

〔例〕芥川龍之介没（昭和2）

〔例〕定価は二五〇〇円（税込み）です。

他の符号についての記述よりも極端に短い。丸ガッコの使用法については説明するまでもないと捉えているかのようなのである。稲垣〔1989：278-279〕は用途を細分化している。（〔例〕の文字は筆者。例文は稲垣から。）

1 語句または文のあとに注記を加えるときに用いる。

〔例〕道順は、商店（酒屋、米屋、たばこ屋等）の人に聞く。

コインランドリーでは、乾燥機を使って、乾かすこともできます。（その場合は別にお金が必要です。）

……………そうだ（伝聞・様態）

2 会話文の中で、動作を示すのに用いる。

〔例〕（玄関に入りながら）ただいま。

3 編集上の注意書きや署名などに用いる。

〔例〕（会話一）（続き）（後略）

4 入れ替え可能の例を示すのに用いる。

〔例〕（行き）ます、（行き）ません（事務の人）に（コピー）を頼む。

5 「または」という意味を表わすのに用いる。

〔例〕市（区）役所

6 かぎや二重かぎの代わりに用いる。特に心の中で考えたことを表わす場合に多い。

〔例〕（長く使えるから結局は得だろう）と
思って、それを買った。

（後略）

後略の部分は電話番号の局番を囲む用法や箇条書きの数字を囲む用法などで、この種の用法・用途は数限りない。この応用範囲の広さが丸ガッコは使い勝手が良いことの証しである。国語の時間にしっかり用法を習うかぎカッコと違い、丸ガッコはいつの間にか使えるようになっていく。誤用の心配もない。

稲垣6の用途が遠藤が調査した内語表現である。稲垣の例文では丸ガッコで括った語句の後に「と
思って」と続き、丸ガッコ内の語句が心中の言葉であることが明示されているが、「思って」「感じて」の類の表現なしに使用されることも珍しくない。

それを、老いた家来の谷善左衛門が頭巾に顔をかくし、ひそかに火盗改めの役宅にいる甥の佐嶋忠介をたずね、声をひそめて告げるとは、

（いよいよ、妙な……）

であった。

一池波、「礼金二百両」、p.15

内語、あるいは心理描写といってもいいであろうが、後に確認するように、これは英文のparenthesesと共通している用途である。しかしながら用法は英文のparenthesesと異なり、日本語独自のものとなっている。この点も含めて、次に英文の丸ガッコの用法と用途を確認する。

英文の丸ガッコの用法および用途

以下では英文の丸ガッコの用法を適宜日本文との比較も交えながら確認する。

A pair of parentheses or brackets is used to append something to a sentence. Being an appendage, the enclosed matter does not replace any part of the sentence. The sentence must be complete without it and in no way depend on it. (丸ガッコはある文に何かを追加するために用いられる。丸ガッコで囲まれた部分は追加されたものなので、それを含む文中のどの部分にも取って代わることはできない。丸ガッコによる追加部分なしでもその文は完結していなければならない、追加部分に従属してはならない。)

[PDAEUS, p.340]

先述のとおり parenthesesはアメリカ英語、bracketsはイギリス英語での呼称である。1つの文中に丸ガッコを用いて語句を挿入する場合、英文では丸ガッコで囲まれた部分の有無に関わらず、その文が成立していなくてはならない。これが日本語の用法とは大きく異なる点である。日本語の場合、丸ガッコで囲まれた語句を取り去ると文型を保持できない用法は珍しくない。

けれども、その時以来、(世間とは個人じゃないか) という、思想めいたものを持つようになったのです。

一太宰、『人間失格』, p.91

谷 [2005] でも指摘したが、上記のような用法が日本語で許されるのは、稲垣6の説明にあるように丸ガッコをかぎ（「」）や二重かぎ（『』）の代わりに用いる用法が発達したためであろう。英文の直接話法の引用符で囲んだ部分、間接話法でのthoughtやwonderedの内容部分、あるいは描出話法に相当する箇所を丸ガッコで囲んでいると考えられる [谷, 2005:68]。

また英文では丸ガッコが文頭に来る用法は許されない。Huddleston & Pullum [2002: 1748-1749] は丸ガッコによる挿入語句を丸ガッコの変わりにコンマを用いて挿入可能なintegrableタイ

プと、コンマでの挿入は不可能なnon-integrableタイプに分類し、integrableタイプは文頭には現れないとしている。*(Not surprisingly) she rejected his offer. これも日本文には適用されない規則である。(non-integrableタイプの文頭出現の有無については触れていない。)日本文の丸ガッコは、稲垣の説明の通り、かぎや二重かぎの代わりに使用されることもあるため、稲垣の例文「(長く使えるから結局は得だろう)と思って、それを買った」のように丸ガッコの部分が文頭に來ることもある。この日本語特有の用法に慣れているためか、たとえば英文では不可とされる上記の例文を日本語に訳した場合でも、「(驚くほどのことではないが)彼女は彼の申し出を断った」のように、日本文として成立する。

英文の丸ガッコの用法に戻るが、丸ガッコで1つの文をまるごと囲み、別の文に挿入してもいい。その場合丸ガッコ内の文は小文字で始まり、ピリオドは打たない。疑問符や感嘆符は丸ガッコ内につく [Greenbaum, 1996 : 537-538]。

Leaning against the table and screwing her left-hand white coral ear-ring tighter (she always looked rather well) she said nonchalantly:

—Bowen, “The Needlecase,” p.166

玉突き台にもたれたまま、左の耳のほうの白い珊瑚のイヤリングのねじを締めなおしながら(彼女はいつも元気そうだった)、さりげなくこう言った。

—太田訳, p.35

I remember, at the start of the *Two Weeks Notice* publicity campaign in the spring of 2003, emerging cheerfully from Victoria Station (was I whistling?) and stopping dead in my tracks with my fingers in my mouth. Where was the apostrophe?

—Truss, *Eats, Shoots & Leaves*, p.3

今でもよく覚えているけど、2003年の春、*Two Weeks Notice*のキャンペーンが始まったころ、私は楽しい気分でヴィクトリア駅から出てきた(口笛を吹いていたかしら?)。ところが突然足が地面に釘付けになり、口の中に指を突っ込んでいた。アポストロフィはどこへ行ってしまったのかしら?

—今井訳, p.5

丸ガッコに囲まれる文は複数でもいい。[Greenbaum, Ibid.]

また、1つの文中への挿入ではなく、文が終わったあとや文と文の間に現れることもある。文中への挿入ではないため、ピリオドは丸ガッコ内に打たれる。[Greenbaum, Ibid.]

His sister Catherine sat with her back to him, playing the piano. (He had heard her as he came up the path.) He looked at her pink pointed elbows—she was playing a waltz and the music ran through them in jerky ripples.

—Bowen, “Telling,” p.177

妹のキャサリンがこちらに背を向けてピアノを弾いていた。(小道を上がってきたときから聞こえていた)。背中側の両側からピンク色のとがった肘を見せて——妹が弾いていたのはワルツ、そのメロディーがとがった両肘の間からポロポロとこぼれ出ていた。

—太田訳, p.137

改行後の一文全体あるいはパラグラフ全体が丸ガッコで囲まれている例もある。

“One of the barmaids?” I asked.

“No. That’s just it. He went out to meet her. I don’t know who she is.”

(Bitter for Caroline to have to admit such a thing.)

“But I can guess,” continued my inde-

fatigable sister. I waited patiently.
—Christie, *The Murder of Roger Ackroyd*, p.22

「相手は女給かなんかですか」とわたしはたずねた。

「いいえ。問題はこれですよ。ラルフはその女に会いに出かけたのよ。それなのに、その相手がどんな女か、わたしにはわからないんですよ。」

(こんなことを認めなければならないとは、キャロラインにとっては辛いことなのだ。)

「でも、想像はついていますよ」とわが不屈の姉はつぶやいて云った。

わたしは辛抱よく待った。

—中村訳, pp.25-26

“ . . . All artists have it.”

(I was working up . . . in the Gifford Chantry at Boyton.)

—Carr, *A Month in the Country*, pp.52-53

「……芸術家は、みんなそうでしょうか？」

(ぼくは、やがて訪れる……ほたて貝の貝殻がみつまっている。)

—小野寺訳, p.73

2つ目がパラグラフ全体を丸ガッコで囲んだ例だが、英文の丸ガッコ内の省略した部分は13行にも及んでいる。

Huddleston & Pullum [2002] から用法についてもう一点挙げる。

[Parentheses'] function is to present that [parenthesized] element as extraneous to a minimal interpretation of the text, as inessential material that can be omitted without affecting the well-formedness and without any serious loss of information. (丸ガッコの役割は挿入句を提示することであるが、その挿入句は本文の

解釈に関ることなく、削除しても本文の形を崩さず情報の重大な消失もない形で提示されなければならない。)

[Huddleston & Pullum, 2002 : 1748]

上記の説明の例文として “It seems that (not surprisingly) she rejected his offer.” [彼女は(驚くほどのことではないが)彼の申し出を断ったようだ。] が挙げられている。丸ガッコで囲まれた挿入部分を取り去っても、確かに「彼女は彼の申し出を退けたようだ」という情報は失われていない。失われるのはこの情報を「驚くほどのことではない」と捉えている書き手の見方である。

ここまで用法を確認してきたが、丸ガッコはどのように何か言葉を挟んでおきたい時に気軽に利用できる便利な符号である。そのため次に挙げるような多彩な用途に用いられる。“digressions, explanations, glosses, and translations” (余談、説明、注釈、訳) [Ritter, 2002 : 143], an explanation or a rephrasing in less technical language, an exemplification, an identification or specification, an elaboration, a concession, a comment, a justification (専門用語を用いない説明や言い換え、例証、確認または特定、詳述、譲歩、論評、弁明) [Greenbaum, 1996 : 537].

文法書やスタイルブックなどで取り上げられているのは上記のような用途だが、応用範囲が広く、先述の通り、実に多彩な表現を生み出す。日本語に入ってきた丸ガッコの使用域が広範なものも道理である。様々な用途として例えば次のようなものがある。

小説の技巧として心理描写を丸ガッコに入れることがある：劇の脚本の傍白 (aside) やト書きを挿入したり、演説などを文字化したものに「笑い」や「拍手」などを丸ガッコで挿入することがある。[現代英語語法辞典：805]

心理描写の例を挙げると、

“I mean how did you discover that such a job existed? Was it in the family?”

(If she could have seen Dad in his office at the scented-soap factory, packing his Gladstone bag of samples!) “Well, yes, in a way I was, Mrs Keach. How clever of you to guess. We were in the cleaning business.”

—Carr, *A Month in the Country*, p.52

「どうして、こんなお仕事のあることがわかったの？代々やってらっしゃるの？」

(親父が香料石鹸の工場の事務室でグラッドストーン・バッグにサンプルを詰めているところを、彼女が見たら!)。「いや、まあ、ある意味じゃそうですよ。奥さん。よくわかりますね。家はたしかに物をきれいにするのが商売だったんです」

—小野寺訳, p.72

心理描写は言い換えれば内語である。日本文では丸ガッコで囲んだ内語部分を取り去ると文型が崩れる例もあるのに対し、英文では丸ガッコの部分があっても周りの文が崩れてはならない原則は常に守られる。

ト書きの例は次の通り。

FENNYMAN is impressed.

FENNYMAN A moment, sir!

ALLEYN (roars) Who are you?

FENNYMAN (bleating) I am the money!

フェニマンは圧倒される。

フェニマン：お待ちください。

アレク：(怒鳴る) おまえは誰だ？

フェニマン：(震え声で) わしは金だ！

—ノーマン, ストッパード, 藤田訳『恋におちたシェイクスピア』, p.82

台本のト書き以外でも、日本語の稲垣の用途2のように動作を表すのに用いられる。

“Had you any idea,” cried Harriet, “of his being in love with her?—You, perhaps, might. —You (blushing as she spoke) who can see into everybody’s heart; but nobody else—”

—Austen, *Emma*, p.333

「気づいてらっしゃったの」ハリエットがたずねた。

「あの方が彼女を愛してるってことに？あなたのことですよ、気づいてらしたんでしょうね。あなたは(話しながら顔を赤らめて)だれの心のなかもお見通しですよ。でもほかのひとたちは——」

—ハーディング訳, p.376

Nunberg [1990] はこの他にも興味深い用途を挙げている。例えば、口やかましい読者からの指摘を避けるためには下記のように丸ガッコで語句を挿入しておけばいい。

Clearly (any utterance of) the sentence *It is raining* will be true only if it is raining when the (utterance of the) sentence is spoken. [「雨が降っている」という文が(発話されて)真となるのは、現に雨が降っている時にこの文が(発話されて)述べられた場合に限りです。]

[Nunberg, 1990 : 112]

Nunbergが用いた表現を借りるなら “I presume that the ordinary reader will not require such a degree of precision, but I add this material as a sop to the picky-picky.” (「通常の読者の方であればここまでの正確さはお求めではないでしょうが、物事に細かい方々にもご満足いただくためにこの部分も加えさせていただきます) [Ibid. : 113] というわけである。この用法の変形として、“in case you’re interested” parentheticals (関心のある向きのための挿入語句)がある。

The facts of her background include: . . . a beloved older brother who was institutionalized in his early 20s for “dementia praecox” (schizophrenia, probably) and died there some ten years later. [彼女のこれまでの経歴の中には、次のような事実がある。つまり、……最愛の兄、この人物は20代前半の頃「早発性痴呆症」(恐らく精神分裂症)で施設に入所し、10年ほど経った頃そこで亡くなった。]

[Ibid. : 113]

Nunbergはまた、小説の作者が読者との関係を確立する手段として用いる丸ガッコの利用例も紹介している。下記の引用において想定される読者は、丸ガッコで挿入される情報を知らないままで満足する人、不愉快なことを受け入れる人の2種類だが、実際の読者はその両方の役割をつとめるといふ [Ibid. : 113]。

Fog everywhere. Fog up the river, where it flows among green aits and meadows; fog down the river, where it rolls defiled among the tiers of shipping and the waterside pollutions of a great (and dirty) city. [Dickens, *Bleak House*] [一面の霧であった。上流では緑の小島と放牧地の間を流れ、下流では並んで係留された船の間と大きな(うす汚れた)都会の間で汚濁にまみれて、うねりながら進んでいったのである。]

[Ibid. : 121]

parenthesesから丸ガッコへ

以上見てきたように英文でも日本語でも丸ガッコの用途は多岐に渡っている。その応用範囲の広さの第一の理由は使い易さである。

英文の丸ガッコは文法書等で、丸ガッコ同様に挿入に用いられるコンマやダッシュと常に比較される。“A dash is a mark of separation stronger than a comma, less formal than a

colon, and more relaxed than parentheses” (ダッシュはコンマよりも強く分離を表示するが、コンマよりは堅苦しくなく、丸ガッコよりも打ち解けた感じがする。) [Strunk Jr., 1979 : 9]

“Dashes, though, tend to give prominence to the inserted word etc. whereas parentheses play it down. Commas are intermediate in prominence” (しかしながらダッシュは挿入された語句を際立たせるのに対し、丸ガッコは挿入語句を弱めてしまう。コンマはその中間である。) [PDAEUS, p.340]

しかし丸ガッコは控えめな見かけによらないダイナミズムを秘めている。先ほども引用した下記の文章にある丸ガッコをコンマやダッシュに置き換えることは不可能である。

“One of the barmaids?” I asked.

“No. That’s just it. He went out to meet her. I don’t know who she is.”

(Bitter for Caroline to have to admit such a thing.)

“But I can guess,” continued my indefatigable sister. I waited patiently.

—Christie, *The Murder of Roger Ackroyd*, p.22.

上記の例で判るとおり、前後の文のない一文全体、パラグラフ全体を囲むなど、丸ガッコは万能なのである。

応用範囲が広いことの2つ目の理由は、誤用の心配がない点である。ダッシュは用法を間違えるのが難しいというが [Truss, 2003 : 157]、丸ガッコもその点は同様である。そのうえダッシュが受けるような批判は挙がってこない。Fowler and Fowlerの*The King’s English*は句読法によくある間違いを取り上げているが、丸ガッコの誤用としてあげたのはわずか一例である。“It is (not a little learning, but) much conceit that is a dangerous thing.” [怖いのは(生兵法ではなくて)自惚れなのである。] 丸ガッコの内容は丸ガッコの中だけで完結していなければならないが

（“a parenthesis should be complete in themselves”）、上記の例だとbutで半端に切れているので不適切という訳である [Fowler and Fowler, 1931 : 294-295]。（ここでも日本語に訳すと日本文としては成立してしまう。）Partridge [1994] も丸ガッコの誤用例は挙げていない。丸ガッコの使用が批判されるとすれば、一つの文章中で使いすぎると論旨が捉えづらくなるので、後から語句を挿入する必要のない文をはじめから書くべきとする趣旨においてである [セイン, 2000 : 57-58 ; Bolinger, 1975 : 608 ; Robinson, 2002 : 306]。

丸ガッコはいつ、どのような形で現れようともし受け入れられる素地がある。たとえば次のような使い方をされても、読者は戸惑うことなしに読み進む。クリスティの『アクロイド殺人事件』から、語り手である医師の家に知人が集ってマージャンが行なわれている場面である。

“If you ask me,” said Miss Ganett.
（“Was that a Bamboo you discarded, dear? Oh! no, I see now—it was a Circle.”） As I was saying, if you ask me, Flora’s been exceedingly lucky. Exceedingly lucky she’s been.”

—Christie, *The Murder of Roger Ackroyd*, p.226

注釈でも心理描写でもない。ここでの丸ガッコは、聞き手の一人であるこの小説の語り手の興味のない部分を囲んでいる。丸ガッコのおかげで興味のない部分は意識の遠くで音が響いているような印象を受ける。

そして日本語にこのまま丸ガッコが移されても、日本の読者も難なく読み進むのである。

「わたし、ひとのことをかれこれ云うつもりはないけどね」とミス・ガネットは云った。「（あなたが捨てたのはソウズ？ あら、ちがった、わかりましたよ、ピンズだったのね。）フロラはほんとに運がよかったですよ。ほ

んとによかったのですよ。」

—中村訳, p.237

丸ガッコはこのように容易に言葉の壁を越えるように見える。「ように見える」としたのは、壁を越えるときに英文における用途のまま日本文に移されているのか甚だ疑問に思える場合があるからで、これが本稿で明らかにするところであり、後に詳しく述べる。

たとえば斜字体だと言葉の壁を越えるのに困難を伴う。内語を表す場合など英文では斜字体が多用されているが、日本文では斜字体を基本的には用いないため、日本文に移す時には工夫が必要となるからである。字体は前後と同じままにするのも1つの方法である。

“After you, Mr. Langdon,” Fache said.
Langdon turned. *After me, where?*

Fache motioned toward the floor at the base of the grate.

—Brown, *The Da Vinci Code*, p.29

「先にどうぞ、ミスター・ラングドン」
ラングドンは振り返った。どうぞって、どこへ？

ファーシュは鉄格子の下の床を指さした。

—越前訳, p.39

著者は同じでも訳者によって斜字体の処理方法は異なる。

First there was the entry. He thought about that . . .

The madman slipped the hook on the outside screen door. Stood in the darkness of the porch

—Harris, *Red Dragon*, pp.10-11

まず第一は犯人の侵入の仕方だ。グレラムが考えたところではこうだった……

—気がいじみた犯人は外側の網戸の掛

け金をソツとはずした。ポーチの暗闇に立っ
たまま……（後略）

—小倉訳, p.28

“You could get the files on Buffalo
Bill. The reports and the pictures. I’d
like to see it.”

I’ll bet you would. “Dr. Lecter, you
started this. Now please tell me about
the person in the Packard.”

—Harris, *The Silence of the Lambs*, p.58

「きみはバッファロー・ビルの一件綴りを
手に入れることができる。報告書や写真。私
はそれを見たい」

〈もちろん、そうだろう〉、「レクター博士、
今度の件はあなたが始めたのです。だから、
あのパッカードの中の人物について教えてく
ださい」

—菊地訳, p.88

斜字体の翻訳の際には様々な工夫が見られるの
に対し、丸ガッコはもともと日英両語において応
用範囲が広く用途も重なっており、また日本語に
深く浸透している符号であるため、先述のクリス
ティの例のように、どのように用いられようと読
むほうは難なく受け入れてしまう。そのためか、
翻訳の際には丸ガッコに配慮する必要があるとは
認識されていない。この点を以下で明らかにする。

翻訳の技法と丸ガッコの扱い

英文から日本語への翻訳の技法を解説した書籍
は数多く出版されている。関係詞の入った文や無
生物主語構文などの日本語とは異なる文構造の処
理方法が解説され、代名詞の処理・文末の処理・
会話文の処理などの際には日本語としての読みや
すさを心がけることなどが説かれている。

数ある翻訳技術のうちどの解説書でも強調され
ているのは、「原文の思考の流れを乱すな」[安西、
1995a: 15] という点である。英文と日本語では

文の構成が違う。それでも「原文で単語や句の並
んでいる順序をできるだけ変えないで、頭から順
に訳しおろしてゆくように心がける」（太字は原
文のまま）[安西、同] ことが非常に重要であり、
これを怠ると原文の論理関係が崩れたり、連続し
た行動の順序がおかしくなるなど様々な害が出現
し、ひいては翻訳文の読者を苦しめることとなる。
順送り訳の重要性は、後ほど実際に翻訳された小
説を検証する際にも関わってくる。

こうした翻訳入門書の中から句読法の扱いを取り
上げているものを探するのは容易ではない。取り
上げていても、コロンやセミコロンなど、縦書き
の日本語には取り入れられていない符号およびダ
ッシュの処理方法に軽く触れる程度である。中村
[1982: 138] には「句読点の処理」という項目が
設けられているが、「日本語では（特に縦書きの
場合には）ほとんど使われない punctuation
marks がよく用いられているのだから、（中略）
訳文は原文と違う句読点のつけ方をする必要があ
る」「私はdashならば訳文の中で強調や挿入など
の効果を出すために使うことがあるが、dashの
使われている原文を必ずdashを使って訳すとい
う原則は立てていない」と述べるに留めている。
中村 [2002: 571-575] は各符号の原文中での働
きと訳し方を詳細に解説しているが、丸ガッコは
扱っていない。

中原 [2003: 202] はコンマ、ダッシュ、丸ガ
ッコを使用した挿入表現訳出時の注意事項として、
挿入句中にさらに挿入句がある場合の符号の組み
合わせの可能性を示した後、日本語に置き換える
際の処理方法を提示している。

- (a) He had, I was (by then) quite sure,
become utterly desperate.
(b) He had (I was, by then, quite sure)
become utterly desperate.
(c) He had, I was—by then—quite sure,
become utterly desperate.
これを直訳すれば、
「彼は—— 私には（そのときまでに）はっ
きりわかっていた——すっかり絶望していた」

のようになるが、日本語では、コンマはともかく、ダッシュやかっこの使用はなるべく避けようとする傾向があるので、この種の挿入は次の程度に訳しておいてもよい。

「私には、そのときまでに、はっきりわかっていて、彼はすっかり絶望していた」

上記の中原の解説は、挿入符号にとらわれずに日本語としての自然さを追求する点は評価できる。ただ原文の著者が挿入符号を選択する際にコンマ、ダッシュ、丸ガッコを使い分けている可能性への配慮がない。先述の通り、この3種の違いについては文法書等なら必ずなんらかの記述がある。さらにいくつか挙げておく。

“Parentheses and dashes signal a sharper break in the continuity of a sentence than do commas” (丸ガッコとダッシュの表示する文の流れの断絶は、コンマよりも明確である。)

[Greenbaum, 1996 : 538]

Parentheses are the commonest brackets. In many situations paired commas or dashes are an alternative to them, though parentheses suggest more of a *sub voce* aside to the reader than commas, which provide a closer and more stressed integration with the text, or dashes, which provide a more abrupt break. [丸ガッコは最も一般的なかっこである。コンマやダッシュがこれに代わることも多い。ただし丸ガッコで挿入されると、コンマで挿入される場合に比べ、語句はひそかなささやきのように読者に提示される。コンマは(丸ガッコよりも)周りの文と緊密に一体化して語句を挿入し、ダッシュは(丸ガッコよりも)出し抜けて文を中断する。]

[Ritter, 2002 : 143]

語句を挿入するという役割は同じでも、コンマ、

ダッシュ、丸ガッコにはこのような差異があるため、符号への配慮が欠けると、著者が符号に担わせているニュアンスが訳出時に抜け落ちる恐れがある。

松本・松本 [1986] はダッシュ、コロン、セミコロン、リーダー、さらに斜字体の役割まで詳説している点で秀逸である。しかしながら丸ガッコに関する記述は見られない。

丸ガッコの処理については、日本語文中での読み易さに配慮する主旨で後述の河野 [1975] に少々記述があるが、他には見つけられなかった。このことから、丸ガッコの訳出の際になんらかの配慮をする必要があるとは認識されていないことがわかる。

訳文における丸ガッコの位置

では実際に翻訳された小説中の丸ガッコによる語句挿入部を検証する。原文はJ. L. Carrの1980年の作品である*A Month in the Country*、日本語翻訳版は小野寺健訳『ひと月の夏』である。日本語版の帯にある文が作品の概要を伝えているので引用する。「1920年の夏のある日、英国ヨークシャの田舎の小駅に一人の若者が降り立つ。村の教会の壁画修復にやってきた彼、バーキンは、第一次大戦で心に深い傷を負っていた。静かな村での主人公のひと夏の経験を柔らかな筆致で描き心にしみる名作。」

主人公でこの小説の語り手でもあるバーキンには吃音があり、時折顔に痙攣が走る。年齢は20代半ばと思われる。その他本稿で引用する部分に関わる登場人物は、実務能力はあるものつまらない人物として描かれているキーチ牧師(30歳ぐらい)の妻で、若くて美しく、魅力的なアリス(19歳か20歳に見える)である。老年になった主人公が、青年時代に壁画修復師として初めて一人で仕事を請け負った時の出来事を回想する形で、物語は進んでいく。

初めに物語の中ほどからの文章を引用する。主人公が村の教会で壁画修復作業を始めてからしばらく経った。誘われるままに村人との交流がすす

み、修復作業現場である教会内部に入ってくる人もいる。下記の引用は作業中に訪れた牧師の妻の様子を主人公が想起している場面からである。

アリス・キーチもしじゅう下へ来ていた。彼女は慎重にドアをすこし開けたままにしておいて、うしろの方の席にすわり、つばの広い麦藁帽で（そのバンドにはバラをつけていた）顔をかくしていた。

—小野寺訳, p.72

丸ガッコの用途を確認する。「顔をかくしていた」で文章が終わり、丸ガッコで囲まれた部分は後ろから付け足して麦藁帽を修飾しているように見える。「麦藁帽にバラをつけていた」という情報の重要度は高くないようである。

この訳文ではまず「……つけていた）顔をかくしていた。」の部分で、言葉が流れづらいつ感じる読者がいるかもしれない。河野一郎は『翻訳上達法』の中で、この引用のような日本語の流れの良くない場合の対処方法に触れている。

ダッシュやカッコを使って説明文句を挿しはさむ場合も、その前後で、文章がそのままつながるような配慮が欲しい。息子（彼の自慢だった）は言った……では、文はすなおに流れない。彼の（ご自慢の）息子は言った……とすれば、（ ）の前後がそのままつながるので、読者の視線は逆戻りしないですむ。

[河野, 1975: 104]

上に倣って文の流れを整えると引用部分は次のようになる。

アリス・キーチもしじゅう下へ来ていた。彼女は慎重にドアをすこし開けたままにしておいて、うしろの方の席にすわり、（バンドにバラをつけた）つばの広い麦藁帽で顔をかくしていた。

（試訳1）

丸ガッコによる挿入部分は、修飾の位置が後ろか

らではなく前から変わったが、相変わらず麦藁帽を修飾する補足情報に見える。つまり丸ガッコの用途は小野寺訳と変わらない。アリスの一連の動作の途中に入ってくるが、丸ガッコで囲まれているためそれほど気にならず、頭に入りやすい文章になった。

しかし日本人が初めから日本語で文を書いても、河野が修正前の文として出したような文が「すなおに流れない」丸ガッコの使い方をするのは珍しくない。

或る日、自分は、れいに依って、自分が母に連れられて上京の途中の汽車で、おしっこを客車の通路にある痰壺たんつぼにしてしまった失敗談（しかし、その上京の時に、自分は痰壺と知らずにしたのではありませんでした。子供の無邪気をてらって、わざと、そうしたのでした）を、ことさらに悲しそうな筆致で書いて提出し、先生は、きっと笑うという自信がありましたので、……（後略）。

—太宰, 『人間失格』, p.19-20

稲垣による丸ガッコの用法の説明に「語句または文のあとに注記を加えるときに用いる」とあったように、何かを述べた後で付け足しが出来ることが丸ガッコの便利さの所以である。多少流れがぎこちないとしても元の訳になんら問題は見当たらない。また河野の「息子（彼の自慢だった）は言った」を丸ガッコが後ろから付け足すかたちを変えずに日本語らしくつなげることは可能である。

その日、体操の時間に、その生徒（姓はいま記憶していませんが、名は竹一といったかと覚えています）その竹一は、れいに依って見学、自分たちは鉄棒の練習をさせられていました。

—太宰, 『人間失格』新潮社, p.26

太宰のように主語を再度提示し「息子（彼の自慢だったのだが）その子は言った」と流れを整えればいい。流れの良し悪しはともかく、丸ガッコは

後付けが基本である。

残像の問題

ここで原文を確認する。

Alice Keach always stayed below too. She would discreetly leave the door slightly ajar and then seat herself in the back pew and shelter behind her wide-brimmed straw-hat (a rose pushed into its band).

—Carr, *A Month in the Country*, p.52

“her wide-brimmed straw-hat (a rose pushed into its band)”の部分のみを見れば、丸ガッコの部分は後ろから麦藁帽を修飾している補足情報に見える。この一文はアリスの一連の動作を描写しているのだから動作と関わりのない麦藁帽についての情報は補足として丸ガッコで付け足した、と解釈してもおかしくはない。つまり元の訳文で充分である。

ところがこの文を頭から見直すと、丸ガッコで囲まれた語句は麦藁帽子の補足と言うだけでは説明できない。動きの一つ一つを‘and’でつなぎ、丹念にアリスの動作を追っている。教会の中に入りそっとドアを開けたままにする——後ろの座席に腰を下ろす——つば広の麦藁帽で顔が隠れる。そして語り手の視線が最後に辿りつくのが、帽子に挿された一輪のバラ。ここまでアリスの動きをイメージしながら読んだ読者の頭の中にも同様に、麦藁帽子に挿された一輪のバラが残像として残る。

この場面以前にも、アリスが登場するたびにバラへの言及がある。出会いの時に帽子に挿してあったのを主人公は見逃していないし、用があって主人公が牧師宅を訪れたときには、いつも一輪挿しているのだとアリスが主人公に話している。引用箇所では丸ガッコで一見控えめに付け足されているが、バラが帽子に挿してあることは語り手である主人公にとって大いに意味を持つ情報である。

丸ガッコの後、原文では下記のように教会内での二人の様子が主人公によって回想される。

But for the occasional creak in the scaffold whenever I shuffled back a pace to see what I'd been doing, the building was so still that, although I was a good thirty paces away and my back towards her, we talked casually as we might have talked in a parlour. Not a conventional conversation — no more than a remark, a question, answer, exclamation. Really, there was no need to look: from the way she put things I could see her face.

—Carr, *A Month in the Country*, p.52

けれども、ぼくが仕事の進みぐあいを見ようとときどき後へさがって足場がきしむ以外教会の中は静まりかえっていたから、彼女との距離は三十歩はあり、ぼくは背を向けていても、二人は居間で話しているように気楽に話せた。社交的な会話ではなく、ちょっとした感想とか、質問、その答え、感嘆といったやりとりなのだ。じっさい、顔を見る必要はなかった。彼女の言葉を聞いていれば、その顔は見えた。

—小野寺訳, p.72

静かな教会の中で距離を置いたまま2人は会話する。語り手は壁に向かって作業している。丸ガッコの入った引用ではアリスが入ってきたときの様子を丹念に描写していたが、上記の引用のとおり、実はその様子を語り手が見ていたかどうかはわからない。あたかもアリスの動きを目で追っているかのような一連の動作のあとに丸ガッコで付け加えられたものは、いわば語り手にとってのアリスの象徴となる大切な情報なのである。丸ガッコの部分も一つの単位として捉え、順送り訳の原則で処理して残像がバラになるようにすれば、挿入された語句が麦藁帽の補足で終わらずに済む。

アリス・キーチもしじゅう下へ来ていた。慎重にドアをわずかに開けたままにしておいて、後ろの方の席に腰を下ろす。すると、つばの広い麦藁帽に顔が隠れるのだった。(帽子のリボンにバラが一輪挿してあった。)

(試訳 2)

文脈と不釣り合いな丸ガッコ

つぎに取り上げるのは小説の冒頭からの文章である。

列車が停まると、ぼくは目の前の旅行かばんを蹴とばすようにしてあわてて下りた。プラットホームでは、駅員が自棄やげのような声で「オクスゴドビー……オクスゴドビー」と叫んでいる。誰も手を貸してはくれないので、ぼくはよろけながらも一度車内へとってかえすと、いくつもの足に蹴つまずきながら(棚の上の)道具袋と(座席の下)の折りたたみ式キャンプ・ベッドをつかんだ。こういうのが北国の人間どもなら、敵国へ来たも同然、よほど用心しなければだめだ。車室の一人の男が深く息を吸い、一人は唸るような声を出したが、どちらも口はきかなかった。

—小野寺訳, p.5

ここでも一読したところでは特に問題は見当たらず、文章の流れも悪くない。ところが気をつけて読むと、「棚の上の」と「座席の下」が丸ガッコで囲まれている理由が不明である。お急ぎでしたら読み飛ばしてくださいとでも言うように、こっそりと文中に挿入されている。他の乗客の足に躓きながらという大変な状況なのだから、道具袋とキャンプ・ベッドが取り出しづらい場所にあったことを示す「棚の上の」と「座席の下」が、重要度の低い補足情報だとは考え難い。むしろこの情報がつくことでさらに語り手の大変な思いに想像が及ぶというものである。丸ガッコを外したいくらいだが、原文はどうなっているだろうか。

When the train stopped I stumbled out, nudging and kicking the kitbag before me. Back down the platform someone was calling despairingly, ‘Oxgodby . . . Oxgodby.’ No-one offered a hand, so I climbed back into the compartment, stumbling over ankles and feet to get at the fish-bass (on the rack) and my folding camp-bed (under the seat). If this was a fair sample of northerners, then this was enemy country so I wasn’t too careful where I put my boots. I heard one chap draw in his breath and another grunt: neither spoke.

—Carr, *A Month in the Country*, p.1

「道具袋 (the fish-base)」と「折りたたみ式キャンプ・ベッド (my folding camp-bed)」に“get at”するとある。LDCEによるget atの定義は“to be able to reach something” (何かに手が届く) で、次の例文が載っている。“We had to move the washing machine out to get at the wiring behind it.” (洗濯機を移動させなければ裏側にある配線に手が届かなかった。) LDCEのCD-ROMに収録されている新聞や本の引用からも、手前に障害物がある等の理由で、目標物を手にするのに困難を伴うことがわかる。Carrの原文でも、道具袋は棚の上でありキャンプ・ベッドは座席の下であるため、乗客の足が邪魔で手をかけにくい。在り処を示す丸ガッコの語句を省くと、乗客の足が何本もあったということでしか困難な状況が表現されない。やはり丸ガッコで挿入された語句は道具袋とキャンプ・ベッドがいかに面倒な場所にあったかを知らしめる重要な情報と考えられる。決してこれなしに済ませられるような補足情報ではない。

丸ガッコが表現するもの

ここでCarrからしばし離れて次の引用をご覧ください。

“My reasons for marrying are, first, that I think it a right thing for every clergyman in easy circumstances (like myself) to set the example of matrimony in his parish; . . .

But the fact is, that being as I am, to inherit this estate after the death of your honoured father (who, however, may live many years longer), I could not satisfy myself without resolving to chuse a wife from among his daughters, that the loss to them might be as little as possible, when the melancholy event takes place—which, however, as I have already said, may not be for several years.

—Austen, *Pride and Prejudice*, pp.85-86

*Pride and Prejudice*から、聖職者であるMr Collinsが一人延々と語り、Elizabethに求婚している場面である。長いので途中を省略したが、どちらも一組の引用符の中に現れる。

英文の丸ガッコの用法の項で確認したように、丸ガッコで挿入した語句は追加されたものであり [PDAEUS, p.340]、その挿入語句は本文の解釈に関わることなく、削除しても情報の重大な消失もないものでなければならない [Huddleston & Pullum, 2002 : 1748]。しかしここでMr Collinsは話しているのだから外していいわけがない。話しているのだから外すことなど出来ない相談である。丸ガッコの代わりにコンマでの挿入も可能な箇所だが、作者のAustenは丸ガッコを用いている。では丸ガッコの部分でMr Collinsはどのように話すのだろうか。

先にCrystal [2003 : 278] から英文の句読法の機能を引用したが、prosodyの項目に疑問符、感嘆符と並んでカッコが挙げられていた。Bolingerは*Aspects of Language*の中でピリオド、コンマ、クエスチョンマーク等の符号とイントネーションとの関係を述べたのに引き続き、丸ガッコについて次のように指摘している。

The only other mark with a fairly clear intonational correlation is the parenthesis. It signifies an overall drop in pitch, with the normal internal pitch contrasts still maintained at the lower level (この他にイントネーションとかなり明確な相関関係のある唯一の符号は丸ガッコである。この符号はピッチが全体的に下がることを示すが、通常のピッチの高低が維持されたまま全体的に下がるのである。)

[Bolinger, 1975 : 607]

丸ガッコの部分は全体的にピッチが下がるという。Mr Collinsが告白しているこの場面を*Pride and Prejudice*の朗読テープで聴くと、確かにピッチが下がって読まれている [Jane Austen *Pride and Prejudice*. Penguin Audiobooks. 1994 London: Penguin Books]。Bolingerの指摘に対して、Nunbergは、ピッチが下がることを丸ガッコが示すというよりも、丸ガッコの部分を読む時にピッチを下げて読む使用域があるとしている (“we would do better to say that ‘a drop in pitch is used in certain registers to pronounce the parenthesis.’” [Nunberg, 1990 : 14])。卵が先か鶏が先かといった様相である。

*Pride and Prejudice*はフィクションなので、Mr Collinsの語りの途中で著者が丸ガッコを用いたのは、読者が読めばMr Collinsの口調が頭の中に響いてくるような表現を目指したと考えても差し支えないであろう。Mr Collinsは謙虚さを表に出さずにはいられない人物であるが、丸ガッコの部分のピッチが下がると、その慇懃無礼な雰囲気を実によく伝わってくるのである。先に引用したRitterを思い出してほしい。“... though parentheses suggest more of a *sotto voce* aside to the reader than commas” (ただし丸ガッコで挿入されると、コンマで挿入される場合に比べ、語句はひそかなささやきのように読者に提示される。) [Ritter, 2002 : 143] 引用では丸ガッコが実際にMr Collinsの目指した “*sotto voce*” (ひそやかな、小声での) なprosodyを表

現する役割を担っているのである。句読法が元々音読用の指針であったことが思い起こされる事象である。そこでCarrからの引用に戻る。

When the train stopped I stumbled out, nudging and kicking the kitbag before me. Back down the platform someone was calling despairingly, ‘Oxgodby . . . Oxgodby.’ No-one offered a hand, so I climbed back into the compartment, stumbling over ankles and feet to get at the fish-bass (on the rack) and my folding camp-bed (under the seat). If this was a fair sample of northerners, then this was enemy country so I wasn’t too careful where I put my boots. I heard one chap draw in his breath and another grunt: neither spoke.

—Carr, *A Month in the Country*, p.1

物語の冒頭なので、この時点では読者が語り手の心情を深く慮ることは困難である。しかしながら、誰も手を貸してくれない (“No-one offered a hand”)、敵国 (“enemy country”) といった表現で乗客たちの無愛想振りが描かれているために、主人公である語り手がこの時楽しい気分ではなかったであろうと想像をめぐらすことは容易である。

Austenからの引用と違い、ここで主人公は言葉が発してはいない。しかし主人公自身が語り手である小説なので、最初の文から主人公が実際に話していると想像して口に出して読んでみるのもいだろう。そして丸ガッコの部分まで来たときに声を落とす。そのとき丸ガッコで囲まれた部分は、主人公の不満を表しているように聞こえてくるのである。「道具袋は棚の上だし、キャンプ・ベッドは座席の下だっていうのに、手を貸してくれるでもなし、進んで脚を除けてくれるでもない。なんて人たちだ。本当に嫌になる。」舌打ちさえ聞こえてきそうである。

語順を考慮することも忘れてはならない。丸ガ

コなしで fish-bass on the rack と my folding camp-bed under the seat であったなら、それぞれをひと塊と捉えていいたろうが、丸ガッコがあるのだから、fish-bass (on the rack) は fish-bass と (on the rack) という2つのかたまり、my folding camp-bed (under the seat) は my folding camp-bed と (under the seat) という2つのかたまりで捉える必要がある。「棚の上の道具袋」や「座席の下のキャンプ・ベッド」が不満なのではない。道具袋が棚の上であり、キャンプ・ベッドが座席の下にあって取り出しづらいことが不満あるいは骨が折れると感じているのである。丸ガッコの部分も一つの単位とみでの順送り訳の考え方がここでも生きてくる。

いくつもの足に蹴つまずきながらも、手を伸ばして道具袋（を棚の上から）と折りたたみ式キャンプ・ベッドを（座席の下から）引っ張り出した。

（試訳3）

日本語の流れの悪さからも面倒な雰囲気が漂っていないだろうか。

丸ガッコになれない parentheses

ところで先ほどのAustenからの引用部分の日本語訳はつぎのようになっている。長くなるが原文も再び挙げる。

“My reasons for marrying are, first, that I think it a right thing for every clergyman in easy circumstances (like myself) to set the example of matrimony in his parish; . . .

But the fact is, that being as I am, to inherit this estate after the death of your honoured father (who, however, may live many years longer), I could not satisfy myself without resolving to chuse a wife from among his daughters, that the loss

to them might be as little as possible, when the melancholy event takes place—which, however, as I have already said, may not be for several years.

—Austen, *Pride and Prejudice*, pp.85-86

「僕の結婚理由はですねえ、まず第一には、ちゃんと暮らしの余裕さえできれば、——つまり、言ってみれば、僕のような場合ですがね——聖職者というものは、みんな家をもって、教区に対して結婚生活の模範を示すべきだと思うんですよ。

(中略)

だが、いいですか、この僕はですね、もしあなたのお父様がおなくなりになるようなことにでもなれば、いや、もちろんそんなことは、まだまだありませんがね、だが、かりにもしそういうことがあればですよ、僕はここの相続者ということになっているんです。だとすれば、僕としてはですね、そうした不幸の場合——いや、いまでも申しあげましたように、そんなことは、ここ当分起りにはしませんよ、だが、かりにそう仮定するとすればですね、やはりこちらのほうのご損を、できるだけ少なくするという意味においても、あなた方ご姉妹のうちの誰かお一人に、妻になっていただくよりほかないと思うんですが、いかがなものでしょう？

—中野訳、『自負と偏見』, pp.66-67

丸ガッコが使われていないことにお気づきであろう。丸ガッコを単純にダッシュに置き換えたのではない。Mr Collinsの「謙虚さ」を表現するために「つまり、言ってみれば、」「いや、もちろんそんなことは、」「だが、仮にもしそういうことがあればですよ、」と前置きを詰め込み、言いよどんでいるかのように読点を多用している。

中野好夫によるこの翻訳が出版されたのは昭和35年(1960年)のことである。羅馬字会が明治18年(1885年)に丸ガッコを紹介してからまだ一世紀も経ていない。当時日本語表記について西尾実

が、符号によって音声をも表記する方向に進むべきであると主張していた〔西尾, 1957, 1961, 1969〕。西尾が強調していたのは、疑問符と感嘆符の乱用(「～か」という疑問詞があるのに疑問符をつける等)をやめ、疑問詞・感嘆詞のない場合に疑問符・感嘆符でイントネーションを表現すべきという考えであった。符号で音調を、ひいては意味を伝えようというわけである。

すでに、これまでも句読点や括弧、……、——、などの符号が用いられているが、それが補助記号と考えられているところに不備が残されている。これらは文字による語の表記を補うだけではなく、文字では表記できないそれぞれの意味表記を独立적으로こなっている。文字が語の音韻を表記することによって、ことばの意味表記をおこなっているのと同じように、これらの符号は、いずれも文の微妙な音声関係を表記することによって、何らかの意味表記をおこなつ(ママ)ている。

[西尾, 1957: 121]

西尾の「括弧」に丸ガッコが含まれるのか、あるいは会話文を表すかぎカッコのみを意味したのか不明である。仮に西尾が丸ガッコも含めていたとしても、世間一般には丸ガッコは微妙な音声関係を表記するという認識は広まっていなかったと考えられる。先述の昭和21年(1946年)発表「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕案」には既に「——」は「語句を言ひさして余韻^{みん}をもたせる」のに用いる、「……」は「話頭をかはずときや言ひさしてやめる場合など」や「会話で無言を示す」のに用いるとある。「——」と「……」では符号と音声の関係が明示されているのに対し、丸ガッコには音声との関わりに関する記述はない。

そしてこの事情は半世紀後の現在も変わっていないのである。本稿執筆のためにあつた日本語表記関連の文献〔稲垣, 1989; 佐竹, 2002; 佐竹・佐竹, 2005; 佐藤, 1978; 中田, 2002〕に、丸ガッコは「声をひそめたことを示すのに用いる」のような音声との関わりを示した記述は見られなかつ

た。……と——については、日本語に入ってから用法・用途に変化は見られるものの、音声に関わる用法も西欧文から取り入れた。ところが（ ）の場合は音声関連情報を取りこぼしたのである。

丸ガッコと音声の関係が英語圏で認識されていなかったわけではない。次に挙げるTrussはイギリスの文筆家であり、本稿で使用した原文はアメリカ版ではあるが、bracketsは丸ガッコと考えていい。

But, as many classically trained actors will tell you, it can be just as effective to lower your voice for emphasis as to raise it. Poets and writers know this too, which is where dashes and brackets come in. Both of these marks ostensibly muffle your volume and flatten your tone; but, used carefully, they can do more to make a point than any page and a half of italics.

[Truss, 2003 : 156]

しかし古典的訓練を経てきた俳優に訊けば誰でも教えてくれるとおりに、強調のために声を低くすることは声を張ることと同じぐらい効果を持つものなのだ。詩人その他の文筆家もそれを心得ている。そしてここでダッシュやカッコが登場するのだ。どちらの記号も、それとはっきり判る形でことばの音量を抑え、声の調子を平板にする。ところが慎重な用方をすれば、これらの記号は1ページ半ものイタリック体を使うよりも、主眼点を明瞭にする上で大きな効果をあげるのだ。

[今井訳, p.191]

ところが英文の句読法をまとめた文献にも丸ガッコと音声の関わりについての記述は見られない。そのせいもあって、日本語に取り入れ損ねたのかもしれない。

丸ガッコと音声の関係を指摘するために中野に

よる*Pride and Prejudice*の翻訳を引用したが、他に下記のような翻訳が存在する。

「僕が結婚する理由は、第一に、暮らし向きの楽な牧師（僕のような）は、……（後略）
[富田訳, 1950 : 166]

「ぼくが結婚する理由は、第一に、安楽な暮らしを（ぼくのように）している牧師は……（後略）

[阿部訳, 1968 : 67]

「さて、結婚理由第一は、(わたしのごとく) 経済上ゆとりのあるすべての聖職者は……（後略）

[伊吹訳, 1996 : 89]

上記の日本語訳ではいずれも丸ガッコが日本文の中でも使用されている。富田訳は文字表現だからこそ可能な言葉遣いである。通常この形〔暮らし向きの楽な牧師（僕のような）は〕（下線は谷）で話す人はいないであろう。声に出すと下線を引いた「な」と「は」のところで言葉が詰まってしまふ。阿部訳と伊吹訳は言葉の流れが良くなる工夫がされている。しかしその工夫の結果出来上がった語順のせいで、「ぼくのように」「わたしのごとく」という表現をたとえ丸ガッコで囲んでも、「ぼく」「わたし」が前面に押し出される。嫌味ではあるが、原文“for every clergyman in easy circumstances (like myself)”の丸ガッコが出すような後付けによる嫌味な謙虚さとは趣が異なる。さらにこの3つの訳に共通することだが、丸ガッコの部分にMr Collinsが声に出したのか、ましてやピッチを下げて話したのかどうかも不明である。原文に丸ガッコがあるというだけの理由で訳文中の当該箇所を丸ガッコで囲むのでは不十分と言わざるを得ない。

英文の会話文中で丸ガッコが用いられることは珍しくない。下記に挙げるのはE. M. Forster作*A Room with a View*からの引用である。話しているのは主人公Lucyの母親Mrs Honeychurch

で、教会に行く準備で慌しくしている。Minnieとは預かっている教区牧師の姪の名であり、丸ガッコ内の言葉は娘Lucyに向かって発せられている。庭に放置されていた本のことも気になっている。Minnieを呼んでいる部分と丸ガッコの中に感嘆符が付いている。

‘It’s a special collection—I forget what for. I do beg, no vulgar clinking in the plate with halfpennies; see that Minnie has a nice bright sixpence. Where is the child? Minnie! That book’s all warped. (Gracious, how plain you look!) Put it under the atlas to press. Minnie!’

—Forster, *A Room with a View*, p.168

「特別な献金なのよ。なんだったか忘れましてけどね。言っておくけど、半ペンス硬貨をお皿のなかにチャラチャラ落とすんじゃないのよ。ミニーにはピカピカの六ペンスを持たせてちょうだい。どこにいるのかしら？ミニー！あの本はすっかりゆがんじゃったじゃないの。(まあ、その服はあなたに似合わないわねえ！) その本、アトラスで重しをしなさい。ミニー！」

—北條訳, p.231

この部分を朗読CD (E. M. Forster *A Room with a View*. Audio Editions. 2003 CA : Audio Partners) で聴くと、一度“Minnie!”と叫んだ後に発せられる「あの本は……。」はかなり低いピッチで読まれ、それに続く丸ガッコ内の表現はさらにげんなりとした調子で、非常に低いピッチで読まれている。

丸ガッコは日本語の中では音調との関わりが認識されていないために、丸ガッコを見ただけではどのような調子で発話されたのかまでは想像が及ばない。また日本語訳の中では発話されたものかどうか判断がつかない。先に確認したように丸ガッコは心理描写に用いられる場合もあることから、この人物の心中の声だと解釈されかねないものである。

川端康成は「新文章読本」の中で下記のように述べている。

われわれは、つねに新しい外来思想をとり入れて、新しい文章を生まなければならぬが、また反面、つねに異国の言葉と口語との間にある、永久に結びがたい一点をも考えねばならない。(中略) 日本には日本語があり、日本の文章がある。

[川端, 1962 : 22]

中野は翻訳の際に、英文の中でMr Collinsの音調を表すために用いられた丸ガッコを、日本人にわかるような別の表現に置き換えたのであった。

*Pride and Prejudice*からのMr Collinsの引用とは違い、本稿で取り上げている*A Month in the Country*の冒頭部分は引用符号で囲まれているわけではない。しかし翻訳の可能性としてこの部分を語り手がまさに語っている(発話している)ように扱い、英文の中の丸ガッコを音調を表しているものとみなしたうえで、日本文では違う形で表現することを試みて、この段落を終えることとする。

いくつもの足に蹴つまずきながらも、手を伸ばして道具袋を柵の上から降ろし、折りたたみ式キャンプ・ベッドを座席の下からやっとの思いで引っ張り出した。

(試訳4)

おわりに

本稿ではまず西欧語の句読法から日本語に取り入れられた丸ガッコの用法と用途を英語と日本語の中で確認し、その使用域は両言語において広範であることを提示した。その上で、丸ガッコは使いやすいくて間違える心配のない符号であることが使用域が広範である理由であると指摘した。さらに丸ガッコはあまりにも日本語になじんでいる符号であることから、どのように用いられようとも読者に容易に受け入れられる傾向にあるため、翻

訳の際には注意が払われてこなかった点を明らかにした。最後に試訳を交えながら、翻訳の基本原則である順送り訳にも注意を払いつつ、英文における丸ガッコを日本文の中で日本語らしく表現することを試みた。その際「後付け」という丸ガッコの特色と日本語には取り込まれていない音声面の特性への配慮が鍵になることを指摘した。

lunulae (ラテン語の*lunula* [三日月型のもの]の複数形)。エラスムスは丸ガッコをその容からこう呼んだという [Parkes, 1992:49, Lennard, 1991:1]。丸ガッコの翻訳の際には、月の囁きに耳を澄ますことが肝要である。

Texts: ([] は本稿で用いた略記)

Austen, Jane, *Emma*. Penguin Books, 1996. First published 1816. (ハーディング祥子訳、『エマ』青山出版社, 1997) [*Emma*]

—— *Pride and Prejudice*. Penguin Books, 1994. First published 1813. (阿部知二訳、『高慢と偏見 説きふせられて』世界文学全集第9巻, 河出書房, 1968) (伊吹知勢訳, 「高慢と偏見」『ジェイン・オースティン著作集2』文泉堂出版, 1996) (富田彬訳, 『高慢と偏見』上巻, 岩波書店, 1950) (中野好夫訳, 『自負と偏見』世界文学大系28, 筑摩書房, 1960)

Bowen, Elizabeth, “Telling,” *Joining Charles and other stories*. London: Jonathan Cape, 1952. First published 1929. (太田良子訳, 「告げ口」『あの薔薇を見てよ』ミネルヴァ書房, 2004) [“Telling”]

—— “The Needlecase,” *The Cat Jumps and other stories*. London: Jonathan Cape, 1949. First published 1934. (太田良子訳, 「針箱」『あの薔薇を見てよ』ミネルヴァ書房, 2004) [“The Needlecase”]

Brown, Dan, *The Da Vinci Code*. New York: Doubleday, 2003. (越前敏弥訳, 『ダ・ヴィンチ・コード(上)』角川書店, 2004) [*The Da Vinci Code*]

Carr, J. L., *A Month in the Country*. Penguin Books, 1980. (小野寺健訳, 『ひと月の夏』白水社, 1989) [*A Month in the Country*]

Christie, Agatha, *The Murder of Roger Ackroyd*. Berkley Books, 2000. First published 1926. (中村能三訳, 『アクロイド殺人事件』新潮社, 1958) [*The Murder of Roger Ackroyd*]

Forster, E. M., *A Room with a View*. Penguin Books,

1955. First published 1908. (北條文緒訳, 『眺めのいい部屋』E. M. フォースター著作集2, みすず書房, 1993) [*A Room with a View*]

Harris, Thomas, *Red Dragon*. Dell Publishing, 1990. (小倉多加志訳, 『レッド・ドラゴン(上)』早川文庫, 1989) [*Red Dragon*]

—— *The Silence of the Lambs*. New York: St. Martin's Paperbacks, 1989. (菊地光訳, 『羊たちの沈黙』新潮文庫, 1989) [*The Silence of the Lambs*]

Truss, Lynne, *Eats, Shoots & Leaves: The Zero Tolerance Approach to Punctuation*. New York: Gotham Books, 2003. (今井邦彦訳, 『パンクなパンダのパンクチュエーション——無敵の英語句読法ガイド』大修館書店, 2005) [*Eats, Shoots & Leaves*]

池波正太郎, 「礼金二百両」『鬼平犯科帳(六)』文藝春秋, 2000. [「礼金二百両」]

太宰治, 『人間失格』新潮社, 1952. 初出『展望』, 1948. [『人間失格』]

坪内逍遙, 『当世書生気質』岩波書店, 1937.

ノーマン, マーク, トム・ストッパード, 藤田真利子訳, 『恋におちたシェイクスピア』愛育社, 1999. [『恋におちたシェイクスピア』]

辞書・辞典

『現代英語語法辞典』三省堂, 2006.

Longman Dictionary of Contemporary English 4th ed. Pearson Education Limited, 2003. U.K. [*LDCE*]

The Penguin Dictionary of American English Usage and Style. Penguin Putnam Inc. 2000. N.Y. [*PDAEUS*]

引用文献

Bolinger, Dwight (1975), *Aspects of Language*. 2nd ed. New York: Harcourt Brace Jovanovich.

Crystal, David (2003), *The Cambridge Encyclopedia of The English Language*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.

Fowler, H. W. and F. G. Fowler (1931), *The King's English*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.

Greenbaum, Sidney (1996), *The Oxford English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002),

- The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lennard, John (1991), *But I Digress: The Exploitation of Parentheses in English Printed Verse*. Oxford: Clarendon Press.
- Nunberg, Geoffrey (1990), *The Linguistics of Punctuation*. CA: Center for the Study of Language and Information.
- Parkes, M. B. (1992), *Pause and Effect: An Introduction to the History of Punctuation in the West*. Hants: Scolar Press.
- Partridge, Eric (1953), *You have a Point There: A Guide to Punctuation and Its Allies*. London: Hamish Hamilton.
- (1994), *Usage and Abusage: A Guide to Good English*. New ed. Ed. by Janet Whitcut. London: Hamish Hamilton.
- Ritter, R. M. (2002), *The Oxford Guide to Style*. Oxford: Oxford University Press.
- Robinson, Paul (2002), “The Philosophy of Punctuation,” *Opera, Sex, and Other Vital Matters*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Strunk Jr., William (1979), *The Elements of Style*. 3rd ed. New York: Macmillan Publishing Co., Inc.
- Truss, Lynne (2003), *Eats, Shoots & Leaves: The Zero Tolerance Approach to Punctuation*. New York: Gotham Books. (今井邦彦訳 (2005), 『パンクなパンダのパンクチュエーション——無敵の英語句読法ガイド』大修館書店)
- 安西徹雄 (1995a), 『英文翻訳術』筑摩書房.
- 稲垣滋子 (1989), 「符号の使い方」武部良明 (編) (1989), 『日本語の文字・表記 (上)』講座日本語と日本語教育 8. 明治書院.
- 遠藤純 (1962a), 「いまの作家は補助符号をどう使っているか——特に、『ダッシュ』と『てんてん』について」『言語生活』第133号. 筑摩書房.
- (1962b), 「内語を表わす補助符号——いまの作家はこう使っている」『言語生活』第136号. 筑摩書房.
- 大橋祿郎 (1962), 「小説での補助符号」『言語生活』第125号. 筑摩書房.
- (1963), 「強調の心理——`、`、`の用法と変遷」『言語生活』第143号. 筑摩書房.
- (1964), 「新体詩の`、`、`、`、`」『言語生活』第153号. 筑摩書房.
- 加藤周一 (1991), 「明治初期の翻訳：何故・何を・如何に訳したか」加藤周一・丸山真男 (1991), 『翻訳の思想』日本近代思想体系15. 岩波書店.
- 川端康成 (1962), 「新文章読本」川端康成・西尾実・折口信夫・高浜虚子・三好達治 (1962), 『新文章読本；日本文芸入門；世々の歌びと；俳句読本；現代詩概観』世界教養全集14. 平凡社.
- 河野一郎 (1975), 『翻訳上達法』講談社.
- 佐竹秀雄 (2002), 「符号の問題」飛田良文・佐藤武義 (編) (2002), 『文字・表記』現代日本語講座第6巻. 明治書院.
- セイン, デイビッド (2000), 『朝日英語スタイルブック』朝日出版社.
- 谷さつき (2005), 「符号の翻訳：Parentheses」『英語の言語と文化研究』第6号. 英語の言語と文化研究会. 2005年9月, pp.63-73.
- 中原道喜 (2003), 『誤訳の構造』聖文新社.
- 中村明 (1984), 「余情論——条件と方法を考える」中村明 (編) (1984), 『表現のスタイル』講座日本語表現4, 筑摩書房.
- 中村保男 (1982), 『翻訳の秘訣：理論と実践』新潮社.
- (2002), 『新編英和翻訳表現辞典』研究社.
- 西尾実 (1957), 『日本人のことば』岩波書店.
- (1961), 『言語生活の探求』岩波書店.
- (1969), 『人間とことばと文学と——言語文化に関する探究』岩波書店.
- 飛田良文 (2002), 「西洋語表記の日本語表記への影響」飛田良文・佐藤武義 (編) (2002), 『文字・表記』現代日本語講座第6巻. 明治書院.
- 二葉亭四迷「余が翻訳の標準」佐伯彰一・松本健一 (監) (1994), 『作家の自伝1 二葉亭四迷』日本図書センター. (初出『成功』1906年1月)
- 松本安弘・松本アイリン (1986), 『翻訳入門』大修館書店.
- 丸山真男・加藤周一 (1998), 『翻訳と日本の近代』岩波書店.
- 文部省教科書局調査課国語調査室 (1946), 「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕案」文化庁 (編) (1986), 『「ことば」シリーズ25 言葉に関する問答集12』大蔵省印刷局.
- 柳父章 (2003), 『日本語をどう書くか』法政大学出版局. 原本は1981年12月PHP研究所より刊行されている.
- (2004), 『近代日本語の思想：翻訳文体成立事情』法政大学出版局.
- 山木幹人 (1978), 「文章上の符号——『——』と『……』

の特徴的性格』『言語生活』第133号. 筑摩書房.

ンの明暗』丸山学芸図書.

—— (1982), 『翻訳語成立事情』岩波書店.

参考文献

- Baker, Nicholson (1993), "The History of Punctuation,"
The Size of Thoughts: Essays and Other Lumber.
 New York: Random House, 1996, pp.71-88.
- Crystal, David and Derek Davy (1969), *Investigating English Style*. Harlow: Longmans, Green and Co. Ltd.
- Fowler, H. W. (1968), *A Dictionary of Modern English Usage*. 2nd ed. Rev. by Sir Ernest Gowers. Oxford: Oxford University Press..
- Fries, Charles Carpenter (1952), *The Structure of English: An Introduction to the Construction of English Sentences*. New York: Harcourt, Brace & World, Inc.
- Turabian, Kate L. (1996), *A Manual for Writers of Term Papers, Theses, and Dissertations*. 6th ed. Chicago: The University of Chicago Press.
- 安西徹雄 (1995b), 『英文読解術』筑摩書房.
- 安藤貞雄・山田政美 (1995), 『現代英米語用法事典』研究社.
- 井上健 (1997), 「必要悪としての学校文法」川本皓嗣・井上健 (編) (1997), 『翻訳の方法』東京大学出版会.
- (2002), 北星学園大学大学院言語文化コミュニケーション専攻集中講義での配布資料
- (2003), 北星学園大学大学院言語文化コミュニケーション専攻集中講義での配布資料
- 岩淵悦太郎 (1977), 『日本語を考える』講談社.
- 久保田修編 (1990), 『日本語の表現』双文社出版.
- 鴻巣友季子 (2005), 『明治大正 翻訳ワンダーランド』新潮社.
- 佐竹秀雄, 佐竹久仁子 (2005), 『(日本語を知る・磨く) ことばの表記の教科書』ベレ出版.
- 佐藤孝 (1978), 『日本語文章表現学』桜楓社.
- セイヴァリー, T. H., 別宮貞徳訳 (1971), 『翻訳入門——その理念と技法』八潮出版社.
- 中田秀夫 (2002), 『文章表現基礎セミナー』明治書院.
- 別宮貞徳 (1979), 『翻訳読本』講談社.
- (1985), 『翻訳と批評』講談社.
- ベンヤミン, ヴァルター, 浅井健二郎, 久保哲司, 西村龍一, 三宅晶子, 内村博信訳 (1996), 『ベンヤミン・コレクション〈2〉エッセイの思想』筑摩書房.
- 柳父章 (1998), 『翻訳語を読む——異文化コミュニケーション

[Abstract]

*Hark, the crescents are whispering!***Some observations on a parenthetical balance between two languages**

Satsuki TANI

The punctuation system of the Japanese language has developed by adopting necessary components from European languages. Amongst the punctuation marks thus adopted into Japanese, parentheses are most readily used. They are equally applicable both in English and in Japanese. The versatile similarities in usages of the punctuation device in the two languages lend ease to automatic transplantation of the mark from an English sentence that contains it to its Japanese translation. On occasion, however, the transplanted parentheses appear incongruous with their surroundings.

In order for parenthesised expressions to be felicitously rendered into Japanese, a number of things should be taken into consideration. Firstly, the conceptual flow of the source language should be respected in the target language. This is true with English-Japanese translation and parentheticals are no exceptions. The position of a parenthesized segment in a English sentence might as well be examined before the portion is translated into Japanese. Secondly, the prosodic use of parentheses, which was not assimilated into the Japanese punctuation system and is, therefore, unacknowledged by Japanese readers, ought to be recognized and transformed into Japanese expressions with no parentheses.

The putting of the above two points into practice may considerably improve the English-Japanese translation.